

246
36
183

白髮
廣文
佛恩
善果
小橫

九



白宗家
觀十世
心

44.11.4



三月 脇巻

白鬘

シテ・僕 翁

ワレ 男
後ツレ 天
ワキ 勅使
神(白)

三月 四日 四日

盛久

シテ 主馬盛久

ワキ 土屋三郎
早乙 太刀取

九月 三日

佛原

シテ 女
後シテ 佛所前

ワキ 僧

四月 四日 四日

善知鳥

シテ 狸所、靈

ワレ 子母
ワキ 子(善知)

三月 四日 四日

小塩

シテ 老翁
後シテ 左兵衛平

ワキ 男

白鬘

君と神と此道はくまの流まる

國が久しき 相見の當分は

なすは下也 扱も江洲白鬘は

神者神 多く海原の悪此程

し ませは法重受の法若ま

より。急ぎの集落トをとし宣旨と

蒙り^{ニヤウ}白髯^{シヤウ}の明神^{メイジン}は。勅使^{チクシ}は
 糸^{イト}の^ノ重^{ヘビ}れ^カも長^{ナガ}閑^{クワン}の
 妻^メの^ノ色^{イロ}は^シく。殿^{テン}を^シく^ク魚^{イサ}の^ノ花^{ハナ}は^シく
 志^シ賀^ガの^ノ山^{ヤマ}越^コえ^テち^ツる^{コト}を^シ野^ノの^ノ入^イ江^エ
 乃^ナ道^{ミチ}も^シら^ハら^ハお^のの^の浦^{ウラ}は^シく^ク乃^ナ
 ち^チよ^ヨる^{コト}浪^{ナミ}も^シ白^{シラ}髯^{ヒゲ}の^ノ言^{コト}は^シく^ク
 急^{イサ}な^{コト}を^シく^ク真^{マコト}二^ニ上^ノ上^ノ釣^{ツリ}乃^ノと^シな^リマ^シラ

何^{ナニ}遠^{トウ}く^シも^シ浪^{ナミ}向^{ムカ}ふ^{コト}あ^ハき^クく^ク母^{ハハ}を^シ
 棹^{ササ}は^シく^ク海^{ウミ}も^シ舟^{フネ}わ^タり^{コト}魚^{イサ}は^シく^ク
 風^{カゼ}は^シく^ク帆^{ファン}を^シく^ク萬^{マン}里^リ
 水^{ミヅ}を^シく^クわ^タり^{コト}
 此^{コノ}ら^ハあ^ハり^{コト}舟^{フネ}子^コは^シく^ク是^{コノ}も^シく^ク朝^{アサ}
 の^ノあ^ハめ^{コト}面^{オモ}白^{シロ}や^ハは^シく^ク今^{イマ}も^シあ^ハる^{コト}
 花^{ハナ}は^シく^ク夜^ヨを^シく^クび^ツて^{コト}身^ミ白^{シロ}妙^{タウ}子^コ花^{ハナ}

乃者も自ら目を見せぬ
海志の心遠慮法のとせりなりき
花はさびらけ山風吹はきりく
漕舟舟乃終るゆるも原乃浦も
もろくも終りてあまつかり海
越路の山道もあまよつとを氣絶
外く 早舟 女舟は是れ城翁は此浦

乃者 シテ舟 乃者 シテ舟 乃者 シテ舟
あさおく シテ舟 中 シテ舟 出釣 シテ舟 となき シテ舟 まま シテ舟
法 シテ舟 法 シテ舟 法 シテ舟 法 シテ舟 法 シテ舟 法 シテ舟
別 シテ舟 別 シテ舟 別 シテ舟 別 シテ舟 別 シテ舟 別 シテ舟
し シテ舟 し シテ舟 し シテ舟 し シテ舟 し シテ舟 し シテ舟
多 シテ舟 多 シテ舟 多 シテ舟 多 シテ舟 多 シテ舟 多 シテ舟
ある シテ舟 君 シテ舟 此 シテ舟 行 シテ舟 せ シテ舟 ま シテ舟 じ シテ舟 け シテ舟 ば シテ舟 夢 シテ舟 の シテ舟 法 シテ舟

又 依る可。おろく。勢。の。か。て。に。
念 其まじり。あり。も。り。に。を。増。く。ま。
 する可。の。二。義。よ。ら。る。天。地。を。て。よ。
 二。う。つ。な。た。い。く。乃。む。ん。ふ。人。壽。
 二。萬。歳。乃。時。か。さ。ふ。世。を。西。天。よ。
 出。せ。し。終。ま。と。ま。い。大。聖。釋。き。其。志。の。
記 ま。と。え。て。塊。率。天。よ。便。し。終。ま。ら。ば。

シテ 我。相。成。道。の。後。に。お。き。う。流。布。の。
 地。に。依。る。可。よ。う。有。べ。き。お。て。此。
 南。東。を。も。て。ん。が。う。を。普。く。發。行。し。て。
 諸。病。り。を。な。す。ま。し。く。と。ある。大。海。
 此。よ。一。切。危。生。悉。有。佛。性。如。來。等。
 住。無。有。妻。易。れ。彼。乃。悉。一。地。の。中。に。
 あり。の。ま。つ。く。お。ら。の。場。と。ある。

以後の大宮狩現をどうとのあり
 名下 皇及人壽百歳の時生達と生れ
 繪して二十年乃其の比頭お面西
 右脇外抜提の後と清経おあき
 佛の壽無不滅法界の妙符あれ
 昔あ乃其の鳩と成り中津
 烟と山分をまらるる時わうかやあま

阿ませずれ等の法代あまは法
 乃名字と人志らるる家又は教山若
 林鹿は彼や志加る此浦の邊よ釣
 をたろく若翁あり釋尊かまよ向
 つく翁を此地のぬららば此
 山を我よあふん公法まわいの地
 とあひべしと宣へた翁をきて

やう我人壽の初めより此
山の麓まで七度まで
芦原又成りてまはるなり
翁也たし此地きつくと成あらば
釣き多可きぬて少きを惜そ
中をば揮毫力あく以て病光去よ
ゆるしと志願のま時よ東がすの海

かゝる世界のあり薬師の如く
ひくまもあや釋きこれ地よ佛法
をのうめおん事又我人壽二万
歳のむらよ此可れ重た事と老
翁いも神むきらひあんが此山を
惜まもまや用閑志は我も此
山の幸とあまき昔よは立百歳の松

入まカニ給ミ白ニきりラ 史余序 上ヒ枕ヒにス乃ニ然ニ
秋ニ色トにシよクまツねシ鼓スもテ舞ハきテ女ニく
神ノありトびクひクまツるル折トらニあハあシ 神ノ也
人ノのチやマあハなシつツくル威シとシまシるハ使シ
してモ也ノ是ノ勅ノの使ありシとモてモ 神ノ也
見ゆクありシ 上まシるル 也 キ 也 社壇ノうチ ト
よりモ 也 被子ニ好シ成シはシきテを出すル

麻ノもレねクつツらニ ヤ 也 あ も の 玉 か き ら ん や ま
渡ル 白 簪 乃 神 の 刀 と す る 勢 れ き り
早 上 知 阿 ら 者 程 乃 流 事 也 カ レ ル マ シ ラ シ ク
よクあハりシ 也 乃 是 君 乃 其 也 シ ラ シ ト
感歎 袖 を う る ほ る 也 シ 也 シ ト ハ シ ク
あら び よ し 乃 舞 樂 其 曲 を 奏 し
つ 勅 役 を あ ら ぬ 申 さ せ し ト

^{上白} 神楽さくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら
 行のやましく 祝曲をとつら。拍子をと
 うう入て 甚遊乃 舞樂の方 舞や
 面白や 此舞樂の 鼓の松ののこら
^中 いううの浪の勢 松風 飛ぶを志らん
 志ん身とましまし 杉からよあふつん
 うらね 雲井うらね かなわらん。とまお乃
^湖 水

^{オモテ} 面鳴動する。天燈籠の出現
^{出端天女出} や 天地の 兩燈あらはれて
^{異宿龍神出} 神前よりあはは物のおこり
^{打上} 草木のやまのり 目あはは 雲うす
^テ 名はけりもり かくて おもひや
^ガ 方のかくて 夜もまやあをあらは
^ハ 花のく 神ははは 雲うす
^テ

神明もはたしてあまをせんじく
と感づけつたあまのあまはま
くまの龍神のついでの上よ
くは海をうしるをうまうて天地
わらわてとびきりあまをうま
白鬚のく神風はる法代とら
あまをまら

威久

如行の去屋敷に申すまはり乃作
何事かきくひそ
下里あは是く限り威久清水
乃方へ輿を立て給ひ引れ社
安手の少のあまの西を東山乃方へ
輿をまられ作へ南を北を

大進の觀音カイン音オンありニ草クサきキも
 かカらラまマのノ誓チカエひヒのノ末スエ一ヒト人トシをシ頼タカま
 ありアリまマしシてテ也ヤ多タ年ネン値チ遇グ乃ノ内ウチ緒ツタ
 縁ヱせセあアらラしシやヤ甚シおオらラぬヌをヲもモ也ヤ
キキつツらラまマのノ清キヨ妙ミョウ寺ジヤウのノ花ハナ威イ海カイのノ雲クモ
 あアまマのノ残ノコりリ那ナ青シヤウのノたタらラぬヌもモ也ヤ
 とト反ハ山サン 龍リウ津シン心シンをヲ人ヒト志シらラしシ見ミ
サ上

渡ワタきキばバ柳ヤナギ楊ヤウとトもモまマせセくク錦キンと
 三ミのノ故コ錦キン乃ノをヲまマしシらラぬヌをヲ思オモひヒ
 乃ノ限リりリ成ナりリまマ車クルマ路ヂよヨ思オモひヒまマごゴうウ名ナ
 跡アトあアまマしシ我ワあアまマしシよヨ馬ウマのノ家カ
 よヨ生ナれレ景ケイよヨかカらラれレあアまマしシ思オモひヒ
 けケるル卵タマゴのノ核カク行コウはハ道ミチ關カンのノ東ヒガシ子コ赴シユきキはハ
 跡アト自ジ行コウとト行コウ浪ナミせセらラぬヌ人ヒトまマ核カクあアらラん

下野の...
家老を頼むと松浦の...
よりの...
わたる...
開宗も...
乃長橋...
はの...
本村と...

乃夕塩の道...
を野へ...
橋を打渡り...
思ふ...
か...
ゆ...
山...
朝...
橋...

清見が三條入海田子浦打出て
三條の富子のね箱根山
於月行也星月夜をや鎌倉は急は
きりく夢中は道ありて塵埃
を隔つるもうこ昔よりばらばらと
こえ水と渡つて。此關東よりまぬ百
年乃榮花の塵平に受一哥の光陰

和 伊裏の入まらるや故郷を雲井のよう
千世と契りて如く替りぬあわ
和 我より鎌倉はるる震るあわ
分乃あらひうわわくしてなみ法人は
面をあらきんよりあつたれらうきり
和 社をとも思ふ 刺意痛くも感入の
獨りて伝ふあつたる去屋が集りてい

今自ケ未カ讀ドク誦ジユ了ルの程ハ法ホウの
生ナと終ハり又マ彼カ法ホウ經キヤウを讀ク誦ジュした度ハ
引ヒけそ有アがる作サへ去ク屋ヤも是コトあり
聽チヤウ入モンしやあうもるまへん 方ホウ種シュ也ヤ大ダイ慈ジ
大ダイ悲ヒの法ホウ薩サク増ゾウ乃ハ也ヤ邪ジャ定テイ業ヤク亦ヤク結ケツ持チ也ヤ
空クウの薩サク乃ハ真ヂン道ダウも也ヤねがわく無ム緣エンの
意イ悲ヒとこれ我ガを導ダウし給キヨウはと生シユれ

利益リキも加カまはぬ生シユ善ゼン可カもたさ
頼ライも人ニ世ニは頼ライ望ボウも空クウく大ダイ聖セイの
誓チカエ約ヤク豈ナニ虚コソ言コトもあらひ也ヤ或オチ遭ウ玉タマ種シュ苦ク
陰イン開カク欲ヨク壽ジュ終シュウ念ネン彼カ觀クワン音オン里リまきの刀タウ壽ジュ
段ダン壇タン 方ホウ種シュ也ヤ此コト法ホウ經キヤウを聽チヤウひしやせは
御ミ命メイを頼ライましうこそ久キウ 矣イ
よく聽チヤウひし相サウ水スイ此コト文モンといつたは
大

人王勤は哭はあふて其うは細腰こよ
され又前悪業退散といふ交はり
矢も身をよきまきれば 冥あまの
まや去あきらまわたく念乃為は此
文を誦まればあらはれ法悪地
獄界畜生生者病死苦以所悪人令
滅文乃とくは乃悪業も

三悪道乃とくは乃悪業も
露の命の惜まはれ及生そりぬ
きれ昔在靈山は名は法華一仏
今西方はあまは又は安楽示現一給
と我らが為の觀世音三世は利益因
とくは刑戮はちうき乃極は
いそもるや威久は終の道よ

からから頼きや羨しきま

う睡眠のうちよあらたなる夢

と蒙りていさうよ羨多秘や

既夫赤い鳥啼ては寂期の時鳥

今ありきやくは出るとや

をたる事あれは左よ金泥の経

右よ花よの珠乃々の命をとと限

あれは是くぞ此世と門出る庭よ

わくとも出る武士前夜とあこみ

つ。是くぞ別乃鳥の聲 鐘もま

あめり東雲よ 籠よを籠れ興よ

由井乃行よ 急ききり 夢路を

ゆる明ほのやく夜の曇り出ある

由井乃行よ 急ききり 夢路を

後^{シテ}後志^{シテ}を早^{シテ}とあ^{シテ}ほ^{シテ}ら^{シテ}を^{シテ}終^{シテ}す

威^{シテ}久^{シテ}も思^{シテ}乃^{シテ}外^{シテ}あ^{シテ}れ^{シテ}ば

を唱^{シテ}へ^{シテ}て^{シテ}侍^{シテ}き^{シテ}れ^{シテ}ど^{シテ}大^{シテ}方^{シテ}私^{シテ}な^{シテ}ま

わ^{シテ}り^{シテ}つ^{シテ}く^{シテ}称^{シテ}念^{シテ}乃^{シテ}聲^{シテ}の^{シテ}下^{シテ}より^{シテ}毛^{シテ}を^{シテ}刀

振^{シテ}揚^{シテ}き^{シテ}つ^{シテ}て^{シテ}き^{シテ}い^{シテ}う^{シテ}よ^{シテ}法^{シテ}經^{シテ}れ^{シテ}き^{シテ}り^{シテ}眼^{シテ}は

ま^{シテ}ご^{シテ}り^{シテ}。お^{シテ}落^{シテ}し^{シテ}たる^{シテ}大^{シテ}刀^{シテ}を^{シテ}な^{シテ}ま^{シテ}じ^{シテ}る^{シテ}二

ま^{シテ}ご^{シテ}り^{シテ}。お^{シテ}落^{シテ}し^{シテ}たる^{シテ}大^{シテ}刀^{シテ}を^{シテ}な^{シテ}ま^{シテ}じ^{シテ}る^{シテ}二

ま^{シテ}ご^{シテ}り^{シテ}。お^{シテ}落^{シテ}し^{シテ}たる^{シテ}大^{シテ}刀^{シテ}を^{シテ}な^{シテ}ま^{シテ}じ^{シテ}る^{シテ}二

ま^{シテ}ご^{シテ}り^{シテ}。お^{シテ}落^{シテ}し^{シテ}たる^{シテ}大^{シテ}刀^{シテ}を^{シテ}な^{シテ}ま^{シテ}じ^{シテ}る^{シテ}二

ま^{シテ}ご^{シテ}り^{シテ}。お^{シテ}落^{シテ}し^{シテ}たる^{シテ}大^{シテ}刀^{シテ}を^{シテ}な^{シテ}ま^{シテ}じ^{シテ}る^{シテ}二

ま^{シテ}ご^{シテ}り^{シテ}。お^{シテ}落^{シテ}し^{シテ}たる^{シテ}大^{シテ}刀^{シテ}を^{シテ}な^{シテ}ま^{シテ}じ^{シテ}る^{シテ}二

ま^{シテ}ご^{シテ}り^{シテ}。お^{シテ}落^{シテ}し^{シテ}たる^{シテ}大^{シテ}刀^{シテ}を^{シテ}な^{シテ}ま^{シテ}じ^{シテ}る^{シテ}二

ま^{シテ}ご^{シテ}り^{シテ}。お^{シテ}落^{シテ}し^{シテ}たる^{シテ}大^{シテ}刀^{シテ}を^{シテ}な^{シテ}ま^{シテ}じ^{シテ}る^{シテ}二

ま^{シテ}ご^{シテ}り^{シテ}。お^{シテ}落^{シテ}し^{シテ}たる^{シテ}大^{シテ}刀^{シテ}を^{シテ}な^{シテ}ま^{シテ}じ^{シテ}る^{シテ}二

中... 此... 由... 度... 愈... 前... 此... 之... 行...

今... 其... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...

法經を修讀せしむるにわたり此時
常刑戮を思ふを思ひて斤斤
急を急しむる初夜より後夜
の一点まで蕭然として居たり
一子云窓らまで明あらず
天崖明あらず思ひもハ旬は
たき給ひ想と又こそを給ふ老僧の

香の祭供えとけ水晶の救珠と
ついでらりて杖ますかりつ
たゞ一三の巻をく我の洛陽東山の
清氷のありよりはぐ為よあり
つり本より大慈大悲の括り
ウヤからん一音成りても我を
念むる時身は玉冠乃哭きのるべし

^{上等}いさか仕る。自多^タ年の^年の^年と^年抽^出は
^{ホカ}て^カ茶^茶心^心人^人は^人あ^あく^くし^しう^う心^心易^易く^く思^思う^う
^コ一^一我^我汝^汝が^が命^命は^は替^替り^りと^と宣^宣ひ^ひく^く
^メ一^一夢^夢の^の見^見は^はあ^あま^まき^きり^り感^感之^之貴^貴く^くお^おの^の
^メて^て飲^飲は^は乃^乃心^心限^限り^りあ^あら^らず^ず頼^頼朝^朝具^具と^と
^ニ因^因ら^ら此^此時^時の^のは^は受^受想^想も^も同^同じ^じ告^告る^ると^と
^メあ^あら^らた^たあ^ある^るは^は信^信感^感の^のあ^あら^らず^ずあ^あら^ら

^{上等}其^其時^時感^感之^之夢^夢は^はあ^あら^らず^ずあ^あら^ら
^上感^感源^源と^とあ^あら^らず^ずあ^あら^らず^ずあ^あら^ら
^上あ^あら^らず^ずあ^あら^らず^ずあ^あら^らず^ずあ^あら^ら
^下て^てあ^あら^らず^ずあ^あら^らず^ずあ^あら^らず^ずあ^あら^ら
^下命^命の^のあ^あら^らず^ずあ^あら^らず^ずあ^あら^らず^ずあ^あら^ら
^下あ^あら^らず^ずあ^あら^らず^ずあ^あら^らず^ずあ^あら^ら
^下乃^乃酒^酒は^はあ^あら^らず^ずあ^あら^らず^ずあ^あら^らず^ずあ^あら^ら

威久よりいさぎ平家備代フダイの侍武サムラヒ
 畧リヤク乃達者タツシヤゆよの乱舞カン堪能タカなり
 園ニる及ツされり。一年ヒトトシ小松殿コマツノお山ヤマよ
 て茸狩タケガリの遊路イソダけ酒宴シユエンよおいて
 五馬ゴウマの威久イサキ一曲ヒトカク一控ヒトコトれり。關東カントウ迄
 毛隠モカクレあり。対文タイモン具クの候コトけ折オリあれは
 一ヒトはりのは可コトあり急イサキで侍サムラヒり

欠

MISSING

佛原

早美
以牙上

余前^ヨきて^カ北^キの^ノ秋^キめ^ニは^シく^シて

乃^ハ白^{ハク}山^{サン}尋^ズん^ニ是^レの^ノ都^ト方^{カタ}より^シ出^スる

僧^{ソウ}あ^リて^ハの^ノ我^ガ来^キ白^{ハク}山^{サン}禪^{ゼン}定^{テイ}き^ハの^ノ程^ハよ

此^コ秋^キ思^ヒの^ノ立^タ白^{ハク}山^{サン}禪^{ゼン}定^{テイ}と^シ志^シて^ハ候

誤^アり^テも^ト秋^キと^シ都^ト乃^ハ白^{ハク}山^{サン}志^シら^ズる^ニシ^テク

了^リぬ^レ此^コも^トあ^リ由^ユ照^シも^ト非^ヒの^ノま^ニて

小原

赤紅紫だしのちうびせ毛りやたうま
 峯のやを由りまてし来侍は
 者難はくワキ有 急の程も是く早か賀の
 國弘乃息もや後たの日の若き程
 小鼻入成あき堂イナヤのまをアカと明たがも
 思名シテ女有 あくワキ有 あまなる法オン僧行
 として其あき堂オンは泊りワキ有 かくま

人かかまワキ有 まんぞく 是く此はは茶
 小まあき女あきの時まころあれこよ
 ひも此あき堂オンは泊りワキ有 こそ有種
 機縁キエンあくまワキ有 更勢ケとら包フ思オンより
 あきまオンはキヤク經オンてよオンと佛フツ子フツあきく

づびゆへトたもてたよト五障ト三徳トの此方
 あれト味トのト香トもト晴トるトまト心ト乃ト味トれ
 備トまトまトあトてト涼ト地ト道ト子ト道ト導ト
 鈴トへト御ト経トをトよトんト仏トをト子トとトあトまトと
 承トるトそれト社ト也ト家トのト命トあトれト徳トとト勇トひトアトス
 へトいトとト若トいト復トあトてトまトまトまトそト ミテ 何 ハ
 其ト心トとトあトらトうトのトしトをト入ト仏トはト前トとトやトし

白シラ拍ヒキ子ウシのト此ト國トよトりト出トへト入ト也ト都トよトりト
 舞マ女メのトおトまトまトれト女メはト勝カちト給トはトりト後ト
 よトいト故コ銀ギンあトれトとトくト此ト國トはト海トりト終ハシはト
 愛メあトくトをト愛メあトれト跡ト乃ト志トるト一トをト
 此ト草ト堂トのト露トとト清トみト其ト跡トはトりト
 一トかトいトもトねトあトりトのト其ト心トよトりトあトりト
 仏トはトあトれトあトりト臨トんトとトくトあトりトてト ミテ 何 ハ

争しんば名可毛昔むさうしる各疎か
 きバワカル今吊らふ毛疑ひあは成仏此
 縁ある其人のシテ名も彰きや一佛
 成道早外觀見ホカ法界カレ草木亦國去シテ人シツ悉
 皆成カレ佛ゴト國時上佛の亦乃草亦シテ色
シテ皆成シテ佛シテ了シテがシテ方シテ難シテ也シテ折シテら
 のシテ聲シテもシテ響シテもシテ聲シテ身シテ佛シテ

早外子とやありきん山風を長風毛カレ疎
 流渡る此原此草木毛心亦也シテ草シテ々シテ々シテ
多上如く仏は昔の由り委く馬物語カガ久
草昔乎相國は侍妓玉妓女佛カ志シテとシテて
 温顔ホシ舞曲ためりて昔らよ名とシテえシテら
 遊女有シテりシテは始め妓玉とシテるシテおシテうシテれ
 て遊舞の寵愛シテありシテてシテくシテきシテ香シテ

をかざる玉夜の神の白露もまじりの
 清涼のうちはさあけらるるあきらま
 のささめあまの思ひはあはれ
 くははるるまはるるまはるるまはるる
 りはるるまはるるまはるるまはるる
 せと秋風の音もささけの雨もささ
 りもささけの音もささけの雨もささ
 りもささけの音もささけの雨もささ

浮世なれ秋の音もささけの雨もささ
 一時乃威あれちるるあきらま
 山もささけの音もささけの雨もささ
 つたはるるまはるるまはるるまはるる
 かにささけの音もささけの雨もささ
 かにささけの音もささけの雨もささ
 かにささけの音もささけの雨もささ

世のさかろ奥深き世の廣き世の閑家
 のかたけく世を思ひぬみおひの外
 ある仙の姿の様をみるありたるを
 うもなきも珍捨る者と成ぬまじ
 我も世のうらあはれの執心かゆるよ
 うもかたけく世の人の心かゆるよ
 仙もくまの世を思ひぬみおひの外
 仙もくまの世を思ひぬみおひの外

感涙を流しつらありあまの昔かづり
 扱直ぬ世今世を思ひぬみおひの外
 人や流し我の世を思ひぬみおひの外
 世もくまの世を思ひぬみおひの外
 行魚行くと白雲の跡をみるありたるを
 草花菴の姿ありあまの昔かづり
 草花菴の姿ありあまの昔かづり

かき草 夜尾花 袈裟の 霧の 茶堂の
うきはよしのまきりく 早上月 松風をひまき此
原のうく 早上月 草のかりぬの床のつはは法
をあ 早上月 草のひから波跡とみぞ有難
ま 早上月 草の種乃馬経やあもや明
方 早上月 草のあもや遠寺の鐘平樂
ひまき月落かぬ山葛れ尻りきりた

かりの床の夢ぐり 早上月 まき 早上月 草のあも
不思 早上月 草のあも佛乃厚の草松よ遊女の
影乃乃 早上月 草のあもあも横ゆつる仏法あは
幽 早上月 草のあもくろ 早上月 まき 早上月 まき 早上月 の境 早上月 けり 早上月 けり
あぐら 早上月 い 早上月 草の 早上月 仏 早上月 の 早上月 位 早上月 の 早上月 位 早上月 を 早上月 わ 早上月 名 早上月 を 早上月 便
あ 早上月 て 早上月 輪 早上月 の 早上月 ま 早上月 の 早上月 ま 早上月 を 早上月 勢 早上月 舞 早上月 と 早上月 あ 早上月 り
極 早上月 楽 早上月 世 早上月 界 早上月 の 早上月 法 早上月 の 早上月 声 早上月 仏 早上月 の 早上月 聲 早上月 あり

屋 此糸乃 佛の袿乃 妖ある袖

外さき木もあびく 動色ハ 獨ある

佛の古名と 尋ねるも 根乃く

わつる法の 場合法の 小空の

教へるもいづれ 程乃 世とや

まぬ 後佛の まぶるあり

中間の この 世はちや

ひびきの 鳥さねとあく 美事の
うちある 夏まほろの 膳はうち
うらむ 有ま しまし 人間

山 雪水の 天は浮る 浪

雲 偏に 露のりめを ば行とら か花

袿の 袖 歩ある 記とこ ころ

佛の まひと 反り くれおとる 記

信房

捨くう勢子げさうに捨く
矢もき電

善気鳥

是の諸国一見の僧さくの我いまの
陸奥うとろを後とカる程の度
思のまがるとの續一見と心はての
又よまびびくおての程よ。立山^{タテヤマ}禪定
やまのつとある程よ。是のつと
まのつとある程よ。是のつと

思^カの^ルの^上の^ハ扱^ハも^レ此^ノ出^ノの^事を^シて^ハ又^ハま^レ
 ま^レ乃^ハあ^リて^ハ成^ルぢ^ウと^シて^ハ此^ノ様^ノも^レ
 怨^ハま^レぬ^レ人^ノの^心を^鬼神^トより^ハ頼^ラせ^テ
 ろ^ハや^ハ山^ノ路^ノも^レち^ハま^レぬ^レ救^ハ多^ク
 の^悪類^ノの^険路^ノも^レは^レら^ハぬ^レあ^リて^ハ
 え^ハぬ^レ此^ノ愧^ハの^心を^時に^シて^ハ山^ノ下^ノに^ハ社^ヲ下^ニ置^キ
 き^レく^ハあ^リて^ハあ^リて^ハ成^ル僧^トは^ハや^ハへ^ル

ま^レの^ハの^ハの^ハ行^ハ事^ヲせ^テの^ハ陸^ノ奥^ニへ^ル
 海^ノの^ハの^ハ作^ルの^ハ言^ハ得^ルの^ハ一^ノと^シて^ハ
 濱^ニあ^リて^ハ獵^ス所^ニあ^リて^ハ者^ノの^ハ去^リぬ^レ秋^ノ
 身^ノま^レの^ハの^ハ其^ノ妻^ノや^ハ子^ノの^ハ宿^ヲを^ハ是^ノ時^ニ
 仍^レて^ハさ^レぬ^レ義^ヲを^ハ手^ニ向^テし^テく^レよ^シ
 信^スる^ハ是^ノ思^ハの^ハを^ハよ^シら^ハぬ^レと^シて^ハ成^ル物^ト
 此^ノを^ハ事^ノの^ハを^ハ程^ノの^ハを^ハと^シて^ハ

はりあたらうもろかむかへもあも
清義引作入も 清義引作入も
なくてきあひあるまも思ひあ
あせ世は今この時を中射ぎさりの
あきぎぬの袖もたて 上
あし海さうへく格衣くさる
ゆく具跡き雲や煙乃立山の亦れも

まの道心も客僧の奥下れば亡者
あかくあつて行かぬさうらぬ
もあひくもあひくもあひくも
世れ習ひさうあからも夢の世の
あま契し恩愛はあまきの路乃忘れ
かまうたしあからあひの母も思
まらふもあまあまあまあまあまあま
あまあまあまあまあまあまあまあま

葉内ハチノ内ヤルヤルシ母白 波ハニニ渡ワタリリノノヲヲ

早早 是是ノノ諸諸國國一一見見ノノ僧僧々々ノノ如如テテ立立山山禪禪定定

ヲヲ作作氣氣ヨヨ其其振振モモ亦亦トトモモ若若クク乃乃

有有リリクク陸陸奥奥ノノ言言傳傳々々トトシシテテ

トト乃乃瀆瀆ムムクク穢穢汚汚ムムクク以以者者ノノ昔昔

此此秋秋予予ままののつつててのの其其妻妻子子ノノ宿宿々々トトシシテテ

ててぞぞななららずずとと言言ふふ手手向向ててくくれれよよとと信信ふふ

移移ヨヨクク乃乃空空ノノヤヤトトシシテテぬぬややははウウ馬馬承承

引引トトシシキキトトシシテテククトトシシテテ時時々々トトシシテテああ

清清キキぬぬれれ袖袖々々トトシシテテ給給ワワリリててのの程程々々

是是迄迄持持テテ来来リリててのの思思ハハ何何カカノノ

事事々々トトシシテテ是是をを夢夢々々トトシシテテ清清々々トトシシテテ何何カカ

手手ニニ田田長長ノノああららななららぬぬとと思思ハハぬぬとと信信ずず

後後々々トトシシテテ去去リリててのの如如ククトトシシテテ行行々々トトシシテテ何何カカ

あれいばや形を又たきる家まで
 ほよねる教務早ころも久しから
 見えから母今も出早おくれを
 疑ひもあつたきおころもく
 一重あはれ合もれ袖ありもるうき
 なつたる管や徳くも備りらひ乃
 法法とあらぬおの申は七者おる

あるまの笠と社手向きれこの笠と社
 日向れ下南無出離生死煩悩
 菩提声陸奥乃うとの後あるよよこ
 身なく成さるうまかむ見し
 とく永離三悪道此文のまゝ
 ぬしやたのむあぐ三悪道とく
 下つたるや此乃ため造立

供養の願らんや。縦くわん大知を
 ありたがる異智火の清怒を。焦
 熱大焦熱ありた。法水はか
 去らら此身はたもま。罪科乃ら
 屋らや。此の鳥きまの殺
 宿罪如霜露。惠目乃日。照し給を
 流僧可陸奥乃。おくほう

ある松原の志のなま。志原の
 来しを志せる。浦雲乃。籠く鳴れ。夜
 屋が。かこも。これと。まだら。あく。月
 け。為。よ。あ。う。も。ろ。さ。あ。ひ。あ。り。き。お。す。ま
 ひ。い。れ。く。あ。ま。い。も。も。い。ま。い。像。や
 消あんと。親子て。又手と。お組く。法
 かり。お。か。後。か。あ。い。か。や。実。い。か。い。か。

此も薬つゝ毒やおもふらうらう
 のねあまてやんから鳥のやもから
 ぞや行へ殺し我子乃いほ
 毛いふらう鳥歎もあらあち
 童あつらふもあつらふもあつらふも
 いさあまもあつらふもあつらふも
 てうかあやれく今もあつらふも

女もまののあつらふもあつらふも
 笠が津乃國あつらふの笠松や箕面
 乃新津あつらふも我袖もあつらふも
 そこのあつらふもあつらふもあつらふも
 松嶋やあつらふもあつらふもあつらふも
 うこのあつらふもあつらふもあつらふも
 女もあつらふもあつらふもあつらふも

て夢は似たり舊友零落してあはれ
 泉はまじりてあはれ
 ぬがし農工高の家も生れも又き
 翠う其心書とさあ母ふたあはれ
 遅くもあはれ
 うあひ秋のあはれあはれあはれ

いしり火志ろうと眠るなり
 九夏は天も暑をわまれ去るのあ
 たもあはれ
 をさるるありありあはれ
 ひく志原の末れ松山夙あはれ
 う仲の名まじりてあはれ

甲一運送もも賀の塩が度までか
 じくももきしきからこむとあき
 くらあよ作うさうがむのさり
 どりよ果かきりたる教生の中よ
 将也め此島のたろちあるれつぐね
 おどの梢ももそ坪志の浪乃うまんと
 もかきよか平砂よふとうぬく落

鷹乃ぞらあ親かすもきれどうさ
 と呼れて子ももかこ答りきりね
 うとられやももさうかさう親
 ちあて血は海をくからせぬ
 すかまのちきをかき家のこれ便り
 をあて隠きかさうれさるあもあら
 けきば程かりかた血乃海よあられ

かゝ安き際あり身乃若しひをたも
きりかへりか。法僧のひききくたへ屋
所僧と云かとねりへう勢よきき

善知

十

小塩

釋

紀よりつゝか願の雲くかおや心

あまき 加模の者か下京多しよ

位居まる老あきくか扱も大原野乃

花とを威成由家乃の同若し人ごを

伴ひ中か今大原山と急作

面自やん度くああれと可から花を

善

都のありあへる大原の地極
今も盛とゆふ花の如く。手向乃社を
あまの原の色こそまき乃時とえて邪
毛まぐゆる塵乃世の花やゆまうは
光く。志とありしを花をかぎ
乃社あがら。若木乃葉も人やまき
年ぬまの鬘を若ぬ志うあれど花

をまれば物思のものがと後毛花
とま今う自密を難く送るありあへる
素乃目は長用まは代乃時あまき
教もれは心花ゆらぬ花さうりく四
方れまきしとも一志原の白ひみち色よ
そ情の道子後ゆも。若あ殿ひる花
心く。若やあ貴賤群集乃其

中^{ナカ}より^{シテ}おぼしき^{コト}は^{ナカ}またき^{コト}は^{ナカ}お若人^{ニハ}花^{ハナ}の枝^{エダ}を
 かざ^ル。は^{ナカ}も^{ナカ}花^{ハナ}や^{ハナ}う^{ハナ}ま^{ハナ}え^{ハナ}花^{ハナ}も^{ハナ}あ^{ハナ}る^{ハナ}も
 行^イく^キま^キり^キ来^キり^キ給^キあ^キら^キう^キ 思^シの^シよ^シら^シひ^シ也^シ
 貴^キ賤^{セン}の中^{ナカ}より^{シテ}わ^キま^キく^キて^キさ^キめ^キ給^キふ^キは^キ
 毛^モ心^{シン}あ^アる^ルは^ハ身^ミの^ノ意^イぎ^ギあ^アは^ハす^スま^マ
 り^リと^トお^オも^モひ^ヒあ^アる^ル人^ニも^モ改^カこ^コそ^ソの^ノあ^ア
 き^キは^ハし^シぬ^ヌま^マの^ノた^タひ^ヒも^モあ^アら^ラざ^ザこ^コそ

な^ナま^マは^ハあ^アら^ラめ^メ心^{シン}う^ウら^ラま^マ を^シら^シと^トま^マら^ラ
 当^{トウ}座^ザ院^{エン}を^シら^シあ^アら^ラま^マや^ヤ此^{コノ}牙^ガの^ノ埋^ウま^マ乃^ニ折^セぬ
 づ^ヅく^クあ^アら^ラめ^メ心^{シン}の^ノあ^アら^ラま^マ昔^{コノ}も^モあ^アら^ラま^マら^ラ
 志^シら^シひ^ヒあ^アら^ラま^マ給^キひ^ヒに^ニ あ^アら^ラ西^シ白^{ハク}の^ノ
 た^タま^マき^キや^ヤあ^アら^ラま^マ誠^{マコト}の^ノ腹^{ハラ}を^シら^シま^マら^ラ
 横^{ヨコ}故^{コト}あ^アら^ラま^マを^シら^シま^マ奥^{オク}床^{シヤ}知^チを^シら^シま^マ語^{コトバ}り^リ給^キ入^イ
 行^イく^キの^ノ後^{ノチ}を^シら^シま^マ感^{カン}づ^ツく^クあ^アら^ラま^マら^ラ

ちぎらぐら思ひ給はらむ 早カレ 空と妙成
 梢のきくうら子陰も大鳥也 シテ白 小塩也
 山乃小松が原もど煙る霞の遠山梅 トホ ヤマ サクラ
早カレ 里行翁の家ごらり 白も窓の梅も
 けしあ 早 あらねる目も紅の シテ 白も
早 雲うら重丸まの 早 朝邊 トホ あらぐ
 錦とゆもきく 早 梅を枝ぬあ

あら花夜まき 早 けしあ トホ 目も月也
早 生相 トホ あら トホ 大鳥也 トホ 小塩
早 山 トホ 今 トホ 思 トホ 志 トホ 伝 トホ 也
早 花 トホ 白 トホ ま トホ 人 トホ 小 トホ 来 トホ 有 トホ 也
 以て作物 トホ 此 トホ ま トホ 倍 トホ 花 トホ をも
 あら トホ 今 トホ の トホ 花 トホ の
 小塩 トホ 大鳥 トホ 也 トホ 小塩 トホ の トホ 山 トホ 也 トホ 小塩 トホ 也

神代草子も思のあらあ。今う可から面

白うの気あや中身入の古歌号かてんそ

事何のぞしむ回子此大原の行

幸よ。在愿業平供な。給ひ一時

かづきおく毛后のほ子をも思ひて

神代のちやとあよこーとあり。やまよつを

く神あきら空たうろやや天地の神

神代草子より人の力乃妹は月の道は浅

からぬ。名残をすね乃山深きくが

ほりくのせ乃おぼりか。あも昔男

衰よりぬるやれ程歎てもうひあかり

まの歎てもうひあかりまを山

身乃さし毛草も志ざあね人とあまよ

毛心ありまら海平。心きら世の神

一平一零一も一ぬ一ぬ一白一雲一乃一公一入一の一様一が一

一此一被一り一ま一して一花一見一車一ら一お一より一月一甚一

一花一又一侍一う一又一之一妻一宵一割一價一又一金

一花一乃一清一書一月一又一影一も一まる一入一る一

一此一時一あり一あ一き一も一り一さ一き一で一

一ま一ぬ一も一神一も一ま一ち一か一く一あ一け一ま一

一と一き一思一入一だ一入一志一ま一ぬ一は一乃一父一の一

一ら一思一白一う一ら一あ一ゆ一り一の一葉一の一露一を一あ一

一よ一ま一れ一ま一る一う一ら一や一ま一ま一ま一自一照一乃一若一

一ま一り一夜一ま一の一乃一此一ま一限一り一ま一ら一む一

一祿一ぞ一陸一奥一は一思一ぶ一ま一ぢ一ま一り一組一ゆ一

一乱一ま一んと一思一お一我一あ一ら一な一く一よ一と一

一毛一む一ら一ま一り一乃一き一う一う一書一は一あ一

一あ一の一ま一の一か一ら一な一は一も一ま一

下段

246
188

復製不許

明治參拾貳年六月廿五日從
同 參拾四年一月廿八日迄
同 四拾四年十月二十五日 再版御届
出版御届濟

訂正者 觀世清



發行兼
印刷者
檜
常
之



印刷所
江
川
堂

京都市上京區二條通麩屋町角
東京市四谷區傳馬町貳丁目

